

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

名詞述語文における形容詞と名詞： 形容詞による連体修飾のありかたをめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 名詞述語文, 形容詞, 文末名詞, 連体修飾, 形式名詞化 キーワード (En): 作成者: 光信, 仁美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006051

名詞述語文における形容詞と名詞

— 形容詞による連体修飾のありかたをめぐって —

光 信 仁 美

要 旨

本稿は、連体修飾研究のひとつのケーススタディとして、「大阪はおもしろい街です」「太郎はまじめな性格だ」のように名詞を述語とする文をとりあげ、そこでの形容詞のふるまいについて考察したものである。

形容詞の修飾をうけた名詞述語がつくる、主語との意味関係には、大きく分けて「種類づけ」と「性質・状態づけ」がある。前者の場合、形容詞によって、あるいは形容詞と名詞のそれぞれによって、またあるいは形容詞と名詞が一体となって、主語の性質が表される。後者の場合、形容詞によって、あるいは形容詞が名詞と一体となって、主語の性質・状態が表される。どちらの場合も、主語の性質を表す機能が形容詞に傾くと、述語名詞は形式化し、ひいては形式名詞となる。なお、後者——形容詞の修飾をうけた名詞述語が、主語にたいして「性質・状態づけ」の関係にたつ文に着目することは、名詞述語文の分類に新たな観点を提供するものである。

キーワード：名詞述語文、形容詞、文末名詞、連体修飾、形式名詞化

0. はじめに

名詞に「だ」「です」などのコピュラがついて述語になっている文を、名詞述語文という。

本稿は、名詞述語文のうち、「大阪はおもしろい街です」「太郎はまじめな性格だ」のように、形容詞（学校文法でいう形容詞と形容動詞）の修飾をうけた名詞が述語となる場合をとりあげ¹⁾、主語と述語の意味的な関係を分析したうえで、形容詞による連体修飾のありかたを考察するものである。

まず1.では予備考察として名詞述語文一般をいくつかの類型に整理する。そして、2.で「形容詞の修飾をうける名詞述語文」における主語と述語の意味関係を分析し、3.において、形容詞がどのような種類の文末名詞（後述）を修飾するか、4.において、形容詞は義務的であるか否か、という二つの観点から形容詞による連体修飾のありかたを考察する。予備考察における名詞述語文の分類を新屋（1994）に、名詞述語文における主語と述語の意味関係の分類を高橋（1984）に、また文末名詞の概念を新屋（1989）に負っている。

研究は、基本的に、収集した事例を帰納的に分析し、文法を現象として記述するという立場をとっている。事例は稿末に掲げた資料から収集したものである。資料の偏りによる影響は、今後、必要に応じて修正していきたい。

1. 予備考察—考察の対象となる名詞述語文の種類—

1.1 主語の形式

ここでは、(述語によつてのべられる)動作・状態・性質などの(広い意味での)属性のもち主を表す文の部分を「主語」とする²⁾³⁾。名詞述語文の主語は基本的に「は」で表されるが、次のように、とりたて助詞で強調される場合や、はだか格で表される場合もある。

(1) …このお婆さんだつて立派な先生なのである。(そういうふうにてきている)

(2) お父さんもお母さんもやさしい人達だったの。(哀しい予感)

(3) それに——今、実加にとっては辛い時期だ。(ふたり)

また、次のような形式も属性のもち主といえるので、主語として想定することができる。

(4) 「…君つて、すてきな人だ」(仮面学園)

(5) 「東京とは寝苦しい処だよ。…」(おとうと)

(6) 岡山というのは、ひとこと言ってしまうとたいへん平和な地である。(むむむの日々)

(7) その当時の僕と来たら、縦から見ても横から見ても、まるで中途半端な存在だった。

(花盗人)

(8) …「煤烟」の主人公に至っては、そんな余地のない程に貧しい人である。(それから)

(9) 「…その人なら中々綺麗な人だった」(友情)

なお、主語には数量を表す名詞がくることもある。

(10) 一人は私がずっと後をつけて来た若い男だ。(勝手にしゃべる女)

(11) 金髪も何人かいるが大部分が褐色か黒い髪だった。(バルセロナの休日)

1.2 意味・情報構造からみた名詞述語文

新屋(1994)(新屋(2014)に所収)は、名詞述語文を意味・情報構造の観点から分類している⁴⁾。新屋(2014)⁵⁾によれば、平叙文は「有題叙述文」「同定文」「指定文」「中立叙述文」「文脈依存文」の5つに分類され、そのうち「指定文」は「有題後項指定文」「陰題前項指定文」「無題後項指定文」の3つの下位区分に分類される。(以下、各例は新屋(2014)より)

第一の「有題叙述文」とは、「太郎は大学生です。」「父は留守です。」などのように、文が「AはB。」の形をとって全体がAとBに二分され、Aを主題としてBでその属性(広義)を述べる文である。

第二の「同定文」とは、「これはきのう買ったセーターです。」「そこでのぞいている子は太

郎だな。」のように「AはBだ。」の形をとって、AとBで指示されるものが、個体レベルで同一であることを示す文である。

第三の「指定文」とは、事象を構成する要素のあるものを特にそれと指定する文である。指定文は情報構造上、聞き手に了解されているとして扱われる部分（前提）、聞き手に了解されていないとして扱われる部分（焦点）にわかれる。そして、この焦点の位置によって次の三つに下位分類される。

一つ目は「有題後項指定文」である。「そう言ったのは太郎だ。」のように、前提が「の」を伴って主題となり、焦点がコピュラの付加によって述語句を構成した形式「AのはBだ」の形をとる文をいう。なお、Aが名詞述語のとき、名詞述語をつくるコピュラと準体助詞「の」は通常潜在化し、「AはBだ」という形式になることが多い。「社長であるのは太郎だ」の「であるの」は通常潜在化し「社長は太郎だ」という形式で表現される。

二つ目は「陰題前項指定文」である。「太郎がそう言った。」のような文で、前提と焦点の区別が形成されていないものである。焦点のありかは音調など、広い意味での文脈に依存する。

三つ目は「無題後項指定文」である。「そのとき口を開いたのが彼でした。」のように「AのがBだ」という形をとって、Aが示す事象の構成要素Bを述語とするが、情報構造上の焦点はむしろAにある形式である。

さて、第四の「中立叙述文」は、「西の空が夕焼けだ。」のような文で、一要素をとりたてて主題とし、出来事を主題と属性の二つに分けて述べる（有題叙述文）のではなく、また、出来事の中の要素をそれと指定する（指定文）のでもない、出来事の全体が素材をそのまま提示する形で客観的に描述される文である。

第五の「文脈依存文」は、いわゆる「ウナギ文」である。「僕はウナギだ。」のような主語と述語の意味関係が、一義的ではなく文脈に依存している文である。なお、この場合の主語は主題化している。

以上の五類型にしたがって、今度は、稿末にあげた資料から収集した「形容詞の修飾をうける名詞述語文」の例を分類すると、解釈上のゆれはあってもいずれかの類型に分類することができ、また該当する例のない項目はなかった。以下にそれぞれの類型にあてはまる実例をあげる。なお、後論の都合上「有題叙述文」「中立叙述文」「同定文」「指定文」「文脈依存文」の順とする。

[有題叙述文]

- (12) その伴侶は若い女であった。（それから）
- (13) 「東京は面白い街ですな」（返事はいらぬ）
- (14) 孤児院はりっぱな社会事業です。（小さな郵便車）

[中立叙述文]

- (15) 何百何千という様々なグラスが、そこに並んでいる。しかもその一つ一つが、それぞれ二万円とか三万円とか四万円とか、なにしろ無茶な値段なのである。(むむむの日々)

[同定文]

- (16) …雪明かりの中に浮かび上がった顔は、異様なほどに瞳を輝かせた、朋子の青白い顔だった。(夜離れ)

[指定文]

<有題後項指定文>

- (17) その窓に咲いているのは白い野バラだ。(バルセロナの休日)
(18) あの夜、哲生にかかってきたのは悪い電話だった。(哀しい予感)
(19) 「…凶器は鋭いナイフだろう」(三毛猫ホームズの追跡)
(凶器であるのは鋭いナイフだろう)
(20) イギリスの古典が何冊か混じっている。けれども大多数を占めるものはやはり分厚い専門書だ。(大多数を占めるものであるのは分厚い専門書だ。)(バルセロナの休日)

<陰題前項指定文>

- (21) これのどこがオフらしい出来事なのだッ。(むむむの日々)

<無題後項指定文>

- (22) ——が、目の前に身構えているのが、ちっほけな三毛猫だと分かると、…(三毛猫)

[文脈依存文]

- (23) びっくりしたんだが、うちは見事な二重帳簿だった。(バルセロナの休日)
(24) 学習院の生徒はみんな黒いランドセルなの。(水辺のゆりかご)

実際の使用例の数では、出来事の中のある要素をそれと指定する「指定文」も少なくはない。また、「同定文」は形容詞述語文や動詞述語文ではなく、名詞述語文でしか表せない文の意味構造であり、名詞述語文の典型の一つであるといえることができる⁶⁾。

しかし、名詞述語文において、現実を反映する文の意味構造の最も単純なタイプは、現実のありさまをモノとその属性に分割し、一方を主語、もう一方を述語として表す文、つまり叙述文であるといえるだろう。したがって本稿では考察の対象をこの叙述文に限定したい。すでに見たとおり、叙述文には「有題叙述文」と「中立叙述文」の二つのタイプがあるが、名詞述語文が基本的な主語と述語の関係を表すときは「有題叙述文」の形をとるのが普通であり、「中立叙述文」はまれである⁷⁾。

2. 「形容詞の修飾をうける名詞述語文」の主語と述語の意味的な関係

「有題叙述文」と「中立叙述文」について、「形容詞の修飾をうける名詞述語文」の主語と述語の意味的な関係をみると、二つのタイプに分けることができる。次の例をみてみよう。

(25) その点では仲町貞子は進歩的な女性だった。(本棚から猫じゃらし)

(26) BHCのほうも本当はもっと古い薬である。(どくとのマンボウ昆虫記)

(27) だけどど街で見かける人はみんな黒い髪だわ。(バルセロナの休日)

(28) やっと初めてひとつむいた時、梨はとともいびつな形だった。(夏の庭)

一つは、(25)(26) のような述語名詞が主語の上位概念を表す場合であり、もう一つは (27)(28) のような述語名詞が主語の上位概念を表さない場合である。以下、それぞれの場合について詳細を検討する。

2.1 述語名詞が主語の上位概念を表す場合（「種類づけ」の場合）

述語名詞が主語の上位概念を表す場合、文の主語と述語の意味関係は、主語で表されるものが、述語で表される一定の種類のものに類別されるという意味関係になる。これは高橋（1984）⁸⁾で示された「種類づけ」にあたる。高橋（1984）は「種類づけ」のつくり方には以下の三つのタイプがあるとしている。以下にそのタイプと具体例を引用する⁹⁾。(番号は筆者)

① 「類づけ」・・・「上位概念で性格づけるもの」

○ええ、さそりは虫よ。(銀河鉄道の夜)

② 「種づけ」・・・「何らかの内包で制限された上位概念で性格づけるもの」

②-1 「内包と上位概念をべつの単語であらわすもの」

○尾道はいいところだよ。(暗夜行路)

②-2 「内包と上位概念を一単語であらわすもの」

○大宮はいったいに運動家だった。(友情)

③ 「別種づけ」・・・「モノゴトの属する本来のカテゴリーとは別の系列のところに位置づけて、性格をしめすもの」

○私は畜生だった。(平凡)

これに照らして考えると、本稿で考察の対象とする「形容詞の修飾をうける名詞述語」が「種類づけ」の意味関係をつくるとき、形容詞による修飾が述語名詞にその内包をあたえるゆえ、その意味関係は②（主語であるモノを）「何らかの内包で制限された上位概念で性格づけるもの」になる。以下、これを利用して②「種づけ」の二つの下位分類の場合についてそれぞれ考察する。

2. 1. 1 上位概念である述語名詞に形容詞が加わることで新しい内包が定義される場合

形容詞の修飾をうけた名詞述語文には、高橋（1984）でいう「内包と上位概念をべつの単語で表した文」、言い換えれば、上位概念である述語名詞が形容詞の修飾をうけることで、述語の新しい内包が定義される場合がある。主語が、形容詞によって表される性質をもったモノに類別されることを表す文である。次の例をみてみよう。

(25) その点では仲町貞子は進歩的な女性だった。(本棚から猫じゃらし)

(26) BHCのほうも本当はもっと古い薬である。(どくとりマンボウ昆虫記)

このような文では、形容詞が主語で表されるヒトやモノの性質を表していて、文体論的な違いをのぞき、次のような形容詞述語文と意味的に非常に似かよっている¹⁰⁾。

(25') その点では仲町貞子は進歩的だった。

(26') BHCのほうも本当はもっと古い。

以上のような名詞述語文では、当然ながら形容詞がなければ、主語と述語の意味的な関係は異なるものになってしまう。次の例をみてみよう。

(25'') その点では仲町貞子は女性だった。

(26'') BHCのほうも本当は薬である。

ちなみに、例(26'')はBHCというものが薬であることをいっているのであるが、(25'')のほうは単に「仲町貞子」が「女性」に含まれることをいっているのではなく、修辭的に主語の性質を表現しているといえる。(26'')は高橋（1984）でいう①「類づけ」になるが、(25'')は②-2のタイプの「種づけ」である¹¹⁾。

上位概念である述語名詞に形容詞が加わることで新しい内包が定義される場合の用例には、次のようなものがみられた。上位概念が「人」「ものごと」「とき・場所」別にあげておく。

[人]

(12) その伴侶は若い女であった。(それから)

(29) 「私は淋しい人間です」と先生が云った。(こころ)

(30) それにしても彼は巨大な人だった。(哀しい予感)

[ものごと]

(31) でも、この反復語はすばらしい表現法だよ。…」(彗星物語)

(32) …やディレクターに比べれば、音声というのはずっと地味な仕事だ。(きみのため)

(33) <オフィスNEXT1>は、大きい会社ではない。(きみのためにできること)

(34) そのためにもサンオイルは不必要な品物だった。(風のことは 海の記憶)

[とき・場所]

(35) …夏はとりわけ残酷な季節である。(さようならなんてこわくない)

(13) 「東京は面白い街ですな」(返事はいらぬ)

この意味関係をつくる述語名詞は、次のように形式名詞（「者」「方（かた）」など）であったり、「かず子は子だ」「今は時期だ」などと言えず、必ず形容詞を伴わなければならない形式名詞化した名詞（「子」「時期」など）であることも多い。

[人]

- (36) 「あなたは、珍しい方ですね。…」(斜陽)
 (37) 「僕は決して怪しい者じゃない。…」(バルセロナの休日)
 (38) 「そうか。君は奇妙な奴だな。…」(銀閣寺)
 (39) 「かず子は、いけない子ね。…」(斜陽)

[ものごと]

- (40) 手紙は梅子から自分に宛てた可なり長いものであった。(それから)
 (41) そういえば、妊娠はおめでたい事なのだ。(そういうふうにできている)

[とき・場所]

- (42) とにかく今はとても楽しい時期である。(そういうふうにできている)
 (43) 「これから六月までは一番気楽な時ですね。…」(こころ)
 (44) それにしてもスペイン村は美しいところだった。(バルセロナの休日)

また、(連体修飾をうけた) 主語の名詞と同じ名詞が述語名詞として用いられる次のような例でも、述語名詞は(連体修飾によって限定された) 主語の名詞の上位概念を表しており、主語が形容詞によって表される性質をもったモノに類別されることを表している。

- (45) その時の担任の先生は、社会の先生で、とにかくとても優しい先生だった。(本棚から)
 (46) 中学校へ入って第一の夏休みは妙な夏休みだった。(おとうと)
 (47) 「…あのね、その子は優秀な子なのよ。…」(おとうと)
 (48) 私のお母さまのお手は、もっとほそくて小さいお手だ。(斜陽)

2. 1. 2 形容詞を付加されなくても上位概念の述語名詞そのものが豊かな内包をもつ場合

述語名詞が主語の属すべき上位概念を表す名詞であるのだが、形容詞を付加されなくても豊かな内包をもつ場合(高橋(1984)でいう「内包と上位概念を一単語であらわすもの」)がある。たとえば、次の例(14)(49)の述語名詞は形容詞の修飾をうけなくても(14')(49')、主語の何らかの性質を表現している。

- (14) 孤児院はりっぱな社会事業です。(小さな郵便車)
 (14') 孤児院は社会事業です。
 (49) オーボエがまた聞こえ始め、アルベニスは安奈を抱き締める。この彼の腕の中は安奈の喜びであり希望で、そして病院は薄汚い現実だ。(バルセロナの休日)
 (49') 病院は現実だ。

このように、述語名詞が主語の何らかの性質を表すとき、形容詞と述語名詞それぞれが主語の性質を表す場合と、形容詞と述語名詞が一体となって主語の性質を表す場合がある。

まず、形容詞と述語名詞のそれぞれが主語の性質を表す例をみてみよう。

- (50) バラス島は、真っ白な小島だ。(きみのためにできること)
バラス島は真っ白だ。／バラス島は小島だ。
- (51) ハンミョウの幼虫もまた猛々しい肉食虫である。(どくとるマンボウ昆虫記)
ハンミョウの幼虫も猛々しい。／ハンミョウの幼虫も肉食虫である。
- (52) ……沢村さんは……また自分の生活を自らの手でこまやかに紡ぐ優しく堅実な主婦でもある。(さようならなんてこわくない)
沢村さんは堅実だ。／沢村さんは主婦だ。

以下、同様の例をあげる。

- (53) 編集長の淀川さんはとっても素敵なおレディだ。(私は変温動物)
- (54) この辺りは、日の高いうちは爽やかな散歩道だ。(返事はいらぬ)
- (55) そして——何日か後、……空は重苦しい灰色だった。(勝手にしゃべる女)
- (56) 気取るといふ事は、上品といふ事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。(斜陽)
- (57) 卓上の談話は重に平凡な世間話であつた。(それから)

ただし、述語名詞は上位概念でもあるため、文脈によっては、次のように名詞が類別する機能だけを果たし、主語の性質を主として形容詞が表現することになる場合がある。

- (58) よく二人ともこんなに大きく育ってくれたものだ…。
…本当に——本当に俺は幸せな父親だよ。(ふたり)
俺は幸せだ。 > 俺は父親だ。
- (59) 「ほく、三角定規と分度器を買うんで、お金が必要なんです」「ほお。おまえは幸運な子供だ。おじいちゃんが学生時代に使っていたのがあるぞ」 (ほくは勉強が)
おまえは幸運だ。 > おまえは子供だ。

次に、形容詞だけで主語の性質を表すのではなく、述語名詞と一体となって主語の性質を表す場合をみてみよう。このとき、形容詞は主語の性質を直接いうのではなく、述語名詞を規定することによって、間接的に主語の名詞の性質を表している。

- (60) 日本は有名な結核国なんです。(おとうと)
?日本は有名だ。／日本は結核国だ。
- (61) 外人モデルの髪の色は上品なブロンズ色である。(岸和田少年愚連隊)
?外人モデルの髪の色は上品だ。／外人モデルの髪の色はブロンズ色だ。
- (62) お化粧だって立派な文化である。(さようならなんてこわくない)
?お化粧だって立派だ。／お化粧だって文化だ。

以下、同様の例をあげる。

- (63) おれたちはいいコンビだった。(不夜城)
- (64) 先程から私はこの人をお婆さんお婆さんと気安くお婆さんよばわりしているが、このお婆さんだって立派な先生なのである。(そういうふうにできている)
- (65) 芝居の中では、娘も縫子も非常に熱心な観客であった。(それから)
- (66) あらゆる化合物のなかで、水は、もっとも単純な化合物である。(砂の女)
- (67) 死というのは絶対的な別れじゃない。残った人との新しい関係だ。(バルセロナ)

2. 1. 3 主語が名詞ではなく述語句 (=名詞相当句) の場合

以上、述語が主語に対して種類づけを表す下位用法として、「上位概念である述語名詞に形容詞が加わることで新しい内包が定義される場合 (2. 1. 1)」と「形容詞を付加されなくても上位概念の述語名詞そのものが豊かな内包をもつ場合 (2. 1. 2)」があることを、主語に人やモノを表す名詞が用いられる場合の例をあげてみてきた。同じ区別が、主語が名詞ではなく、準体助詞「の」や形式名詞「ところ」「こと」などによって導かれた述語句の場合にもあてはまる。

[上位概念である述語名詞に形容詞が加わることで新しい内包が定義される場合]

この場合、主語は述語名詞が表す上位概念名詞のいわば解説になっている。また、その主語の性質が述語名詞を修飾する形容詞によって示されている。たとえば、例 (68) の主語「自分の名前が書かれている本を堂々と古本屋に売るといふのは」は、「行為」の具体的な内容であり、主語の性質は述語名詞を修飾する形容詞「大胆な」で表されている。

- (68) 自分の名前が書かれている本を堂々と古本屋に売るといふのはなかなか大胆な行為である。(ホンの本音)

以下、同様の例をあげる。

- (69) 粗末な板塀にかこまれてガランとした場内に、ただ鉄の杭だけが並んだところは、何かしら無惨な光景だった。(アメリカ感情旅行)
- (70) だから、今回妊娠四ヶ月にして体重が五十三キロになった事は私にとって恐ろしい現象だった。(そういうふうにできている)
- (71) わざわざそのためだけに六本木にやってくるというのも煩わしい話だ。(返事は)

[形容詞を付加されなくても上位概念の述語名詞そのものが豊かな内包をもつ場合]

この場合も、主語は述語名詞の解説になっている。また、2. 1. 2 でみたように、主語の性質として形容詞と述語名詞のそれぞれの性質を取り出せる場合 (72) (73) もあるし、形容詞と名詞が一体となって性質を表す場合 (74) (75) もある。

- (72) マスクが送られてきたというのは重要なサインだ。(仮面学園)
マスクが送られてきたというのは重要だ。／マスクが送られてきたというのはサインだ。
- (73) 小説を書くというのは、だいたいにおいて地味で寡黙な仕事なのである。(うずまき)
小説を書くというのは地味で寡黙だ。／小説を書くというのは仕事だ。
- (74) それだけ男子学生の勉学の場がせばめられるのは、社会的な損失である。(さようなら)
?それだけ男子学生の勉学の場がせばめられるのは、社会的である。／
それだけ男子学生の勉学の場がせばめられるのは、損失である。
- (75) 六本木駅の伝言板に伝言を書くのは、そんな生活のなかで見つけた、ささやかな気晴らしだった。(返事はいらぬ)
?六本木駅の伝言板に伝言を書くのは、ささやかだった。／
六本木駅の伝言板に伝言を書くのは、気晴らしだった。

2.2 述語名詞が主語の上位概念を表さない場合(「性質・状態づけ」の場合)

主語の上位概念を表さない述語名詞が、形容詞の修飾をうけて用いられると、述語は主語の性質や状態を表すようになる。これは高橋(1984)の「性質づけ」と「状態づけ」にあたるが、この区別は本論の内容に影響しないため、ここでは一括して扱う。次の例で「髪」「形」は、主語「人」「梨」の上位概念ではなく、述語「黒い髪」「いびつな形」が主語の性質あるいは状態を表している。

(27) だけど街で見かける人はみんな黒い髪だわ。(バルセロナの休日)

(28) やっと初めてひとつむいた時、梨はとともいびつな形だった。(夏の庭)

形容詞の修飾をうけた名詞述語は主語の性質や状態を表すが、形容詞と名詞が一体となる場合と、形容詞にその表現機能をあずけ、名詞が形式的に用いられる場合がある。いずれの場合も形容詞がなければ文をなさない。

2.2.1 形容詞と名詞が一体となって性質や状態を表す場合

形容詞と名詞が一体となって性質を表す場合には、述語名詞が主語の、部分である場合(①)、性質・状態の側面である場合(②)、動作あるいは動作の側面である場合(③)がある。以下にその具体例をあげる。

① 述語名詞が主語の部分である場合¹²⁾

<ヒトの部分>

(27) だけど街で見かける人はみんな黒い髪だわ。(バルセロナの休日)

(76) ぼくはこんな長い鼻じゃなかったはずだ。(夏の庭)

- (77) ぼくたちは、いい気分だった。(夏の庭)
(78) 実加は、何だか、やり切れない気持ちだった。(ふたり)
(79) わたしは自由な身体でした。(こころ)

<ものごとの部分>

- (80) 東舞鶴中学校は、ひろいグラウンドを控え、のびやかな山々にかこまれた、新式の明るい校舎であった。(金閣寺)
(81) 中学生みんなが憧れている短剣は、実に美しい装飾だった。(金閣寺)
(82) 土手を歩く間じゅう碧郎のしゃべることは、人が変わったような凄い下等なことばつきである。(おとうと)

②述語名詞が主語の性質・状態の側面を表す場合

- (15) 何百何千という様々なグラスが、そこに並んでいる。しかもその一つ一つが、それぞれ二万円とか三万円とか四万円とか、なにしろ無茶な値段なのである。(むむむ)
(83) 私は中国に行けば中国人、韓国に行けば韓国人……その国の人からたちまちその国の言葉で道を訊かれるほど、普遍的にオリエンタルな顔立ちなのだ。(さようなら)
(84) 次の日の朝は、アルベニスが予想したとおり素晴らしい天気だった。(パルセロナ)
(85) つまり、ふたりとも、珍しく不幸な生い立ちではないのだ。(ディズニールランド)
(86) ええい次のレースは鉄板本命だ。二人のイン選手がいい調子である。住之江のインほど強いものはない。(岸和田少年愚連隊)
(87) 手紙はぶよぶよと、変な手触りだった。(砂の女)
(88) 補欠入学をした私は…二百人中百八十番というひどい成績だった。(水辺のゆりかご)

③述語名詞が主語の動作あるいは動作の側面を表す場合 (以下二例は作例)

- (89) われわれはいつも場当たりのやり方だった。
(90) 彼女はたいい曖昧な返事だった。

2.2.2 名詞が形式的に用いられている場合

名詞が主語の何らかの側面を表していても、性質や状態を表す機能を形容詞にあずけ、述語名詞はもっぱら述語をつくるためだけに用いられる場合がある。次の例(91)(92)では、それぞれ名詞を除いて「収入は莫大だ」「紀野恵はユニークだ」としても、意味はあまり変わらない。

- (91) 収入は銀閣のほうが金閣の半分ほどであるが、それでも莫大な金額である。(金閣寺)
(92) 紀野恵は、二十代の女流の中でも、ひときわユニークな存在だ。(三十一文字)

この用法をつくる名詞には次の①～③がある。

①存在の側面を表す名詞である場合

- (28) やっと初めてひとつむいた時、梨はとてもいびつな形だった。(夏の庭)

- (91) 収入は銀閣のほうが金閣の半分ほどであるが、それでも莫大な金額である。(金閣寺)
- (93) あの曲の歌詞もよく見ると、随分、他力本願的な内容である。(ディズニーランド)
- (94) 私の体はこんなにも単純な仕組みであったのか。(そういうふうにできている)
- (95) 「実は——美奈子は非常にデリケートな性質でして。…(死体は眠らない)
- (96) …まずいことに四人が四人ともそれぞれに私の強い気象だった。(おとうと)
- (97) しかし、彼女は、そういう「お嬢様」でありながら、…優しい性格だった。(勝手に)

②述語名詞が「存在」である場合

- (92) 紀野恵は、二十代の女流の中でも、ひとときユニークな存在だ。(三十一文字)
- (98) あれこれと張り合う必要のない友人は、貴重な存在だ。(夜離れ)
- (99) とにかくわたしたち人間は、そのように非情な存在なのです。(小さな郵便車)

③述語名詞が外見のなことがらを表す場合

- (100) 部屋は相変わらずで——いや、むしろ以前より、侘しい感じだった。(勝手に)
- (101) 添田刑事も、さすがに深刻な様子だった。(死体は眠らない)
- (102) 医院長はこうしてもうすでに生じてしまった事に対しては、「……」の一言で
こだわらなかったが、暗い表情であった。(おとうと)

2. 2. 3 述語名詞が分類・階層・レベルを表す場合

2. 2. 2でとりあげた述語名詞は主語の何らかの側面を表すものであったが¹³⁾、同じく形容詞に主語の性質を表す機能をあずけ、形式的に用いられる名詞には、分類、階層・レベルなどを表すものがあるので、ここに別にあげておく。述語名詞に「方(ほう)」「ほど」「くらい」などの形式名詞が用いられるケースもある。

- (103) 「三千代の病気は今云う通り軽い方じゃない。…」(それから)
- (104) この大家のおせっかいは、まさに異常なほどであった。(むむむの日々)
- (105) 「来たか」と云った。その語調は平常よりも却って穏やかな位であった。(それから)
- (106) 気が弱いどころか、いまおれ、気が強いてっぺんなんだよ。(おとうと)
- (107) この人たちは、本当に恐ろしい人種である。(私は変温動物)

3. 文末名詞文との関係について

以上、2. では、名詞述語文として最も単純な意味構造をもつ「有題叙述文」「中立叙述文」において、述語名詞が形容詞の修飾をうける場合について、主語と述語の意味的な関係を考察してきたが、ここでは、「文末名詞文」という別の観点からみた名詞述語文を参照し、先の2. の分析によって得た「形容詞の修飾をうける名詞述語文」の各タイプを位置づけてみたい。

3.1 文末名詞文とは

「文末名詞」および「文末名詞文」は新屋（1989）のタームである。新屋（1989）では、連体部を必須とし、コンピュータを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係にない名詞を、「文末名詞」、文末名詞をもつ文を「文末名詞文」と呼んでいる¹⁴⁾。以下は新屋（2003）¹⁵⁾にまとめられた文末名詞の種類である。

分類・階層に関するもの	：種類、類、たぐい、タイプ、方、部類、クラス、階層、系統
属性に関するもの	：性質、構成、仕組み、形式、顔立ち、体格、形、運勢、身分
様態に関するもの	：感じ、様子、状態、有様、格好、気配、態度、口調、表情
主観に関するもの	：感じ、思い、気、意向、考え、予定、意見、印象、解釈
状況解説に関するもの	：塩梅、具合、次第、道理、話、理屈、わけ、顛末、始末
時空的位置に関するもの	：最中、寸前、近く、そば、隣、途中、
伝達に関するもの	：こと、話、由、噂、評判

次に、それぞれの具体例を新屋（1989）から引用する¹⁶⁾。

分類・階層に関するもの	：三千代の病気は今云う通り軽い <u>方</u> じゃない。（それから）
属性に関するもの	：荻乃は女のくせに大きな乱暴な字を書く <u>たち</u> だった。（金環蝕）
様態に関するもの	：神谷直吉は返事に窮した <u>様子</u> だった。（金環蝕）
主観に関するもの	：僕だってこのままでは兄さんに対してすまない <u>気持ち</u> です。（氷壁）
状況解説に関するもの	：いずれ改めて拝眉、万々御礼申上げ度く存じますが、とり急ぎ使 い を以て右御挨拶申上げる <u>次第</u> であります。（金環蝕）
時空的位置に関するもの	：郵便局はあの角を曲がった <u>所</u> です。
伝達に関するもの	：財部総裁の退職金は大変な金額だったという <u>話</u> だね。（金環蝕）

野田（2006）は¹⁷⁾、新屋（1989）の文末名詞は、「属性に関するもの」「分類・階層に関するもの」のグループと、「様態に関するもの」「主観に関するもの」「状況解説に関するもの」のグループとの、二つにわけることができると主張し、その理由を次のように説明している¹⁸⁾。

後者の文末名詞のうち、まず「様態に関するもの」の例「彼は出かける様子だ」（アンダーラインは筆者）は「彼は出かけるようだ」に近い意味をもっており、文末名詞「様子だ」は様態のムードを表す助動詞「ようだ」に相当する。「主観に関するもの」の例「彼は辞職する考えだ」は「彼は辞職しようと考えている」のような思考動詞の表現に近い。また、「状況解説に関するもの」は、いわゆる「説明のムード」に近い意味を表し、助動詞相当である。つまり、これらはいずれも広い意味での「補文」をとるような「複合述語」的な機能をもっているグループであり、この点で、前者の「属性に関するもの」「分類・階層に関するもの」の文末名詞の用法とは異なっている。

なお、野田（2006）では「時空的位置に関するもの」と「伝達に関するもの」についてはふれられていない。

3.2 形容詞の修飾をうける名詞述語文と文末名詞文との関係

ところで、本稿で考察の対象とした「形容詞の修飾をうける名詞述語文」のうち、2.2「述語名詞が主語の上位概念を表さない場合（「性質・状態づけ」の場合）」の述語名詞は「連体部（この場合、形容詞）を必須とし、コピュラを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係にない名詞」であるので、文末名詞であり、その文は文末名詞文である¹⁹⁾。

このうち、2.2.3 述語名詞が分類・階層・レベルを表す場合（103）（104）は前述の新屋（1989）の「分類・階層に関するもの」にあたる。

（103）「三千代の病気は今云う通り軽い方じゃない。…」（それから）

（104）この大家のおせっかいは、まさに異常なほどであった。（むむむの日々）

そして、2.2.2 名詞が形式的に用いられている場合の、①存在の側面を表す場合（28）（91）と②「存在」である場合（92）は「属性に関するもの」にあたる。

（28）やっと初めてひとつむいた時、梨はとてもいびつな形だった。（夏の庭）

（91）収入は銀閣のほうが金閣の半分ほどであるが、それでも莫大な金額である。（金閣寺）

（92）紀野恵は、二十代の女流の中でも、ひときわユニークな存在だ。（三十一文字）

また、2.2.2の③述語名詞が外見のなことがらを表す場合（100）（101）は「様態に関するもの」にあたる。

（100）部屋は相変わらずで——いや、むしろ以前より、恠しい感じだった。（勝手に）

（101）添田刑事も、さすがに深刻な様子だった。（死体は眠らない）

したがって、野田（2006）とは別に、文末名詞は、本稿2.2で扱ったような、単独の形容詞の修飾をうけることがありうる文末名詞（「分類・階層に関するもの」「属性に関するもの」「様態に関するもの」と、単独の形容詞の修飾をうけることのない文末名詞（それ以外）との、大きく二つのグループに分けることができる。

4. 形容詞の義務性について

ここでは2.で考察した「形容詞の修飾をうける名詞述語文」の、主語と述語の意味的な関係における形容詞の義務性についてまとめておく。

まず、述語名詞が主語の上位概念を表す場合（2.1）の意味関係のうち、2.1.1で考察した、「上位概念である述語名詞に形容詞が加わることで新しい内包が定義される」場合、次の例（25）（39）（36）のように、形容詞が述語名詞の内包を規定することによって、主語の性質

を述定しているので、形容詞は必須要素である。ここでの名詞は、述語を形成するために用いられるという機能的な性格をもつもの (25) にすぎず、形式化したり (39)、形式名詞が用いられる (36) ようにもなる。

(25) その点では仲町貞子は進歩的な女性だった。(本棚から猫じゃらし)

(39) 「かず子は、いけない子ね。…」(斜陽)

(36) 「あなたは、珍らしい方ですね。…」(斜陽)

次に、2. 1. 2 でとりあげた、「形容詞を付加されなくても上位概念の述語名詞そのものが豊かな内包をもつ」場合、その述語名詞はすでに主語の性質を表すものである。したがって形容詞は必須要素ではない。用法として、意味的に形容詞の独立性が強く、形容詞と名詞のそれぞれが主語の性質を表している場合 (50) と、意味的に形容詞の独立性が弱く、述語名詞と一体となって主語の性質を表している場合 (60) がある。

(50) バラス島は、真っ白な小島だ。(きみのためにできること)

バラス島は真っ白だ。／バラス島は小島だ。

(60) 日本は有名な結核国なんです。(おとうと)

?日本は有名だ。／日本は結核国だ。

述語名詞が主語の上位概念を表していない場合 (2. 2) の「述語名詞が主体の部分・側面」である文 (2. 2. 1 と 2. 2. 2) は、主語で表されたものを、形容詞が表す性質の部分・側面をもったものとして述定している。したがって、この意味関係をつくるために形容詞は必須要素である。そして、名詞が抽象的な側面を表すようになると、もっぱら形容詞が主語の性質を表すようになり、名詞は形式化 (28) する。

(27) だけど街で見かける人はみんな黒い髪だわ。≠人は黒い (バルセロナの休日)

(28) やっと初めてひとつむいた時、梨はとてもしびつな形だった。 (夏の庭)

= 梨はいびつだ

また、述語名詞が抽象的な「分類や階層・レベルなど」を表す場合 (2. 2. 3) も、形容詞が主語の性質を表しており必須要素である。名詞は形式化 (107) したり、形式名詞であるケース (103) が多い。

(107) この人たちは、本当に恐ろしい人種である。(私は変温動物)

(103) 「三千代の病気は今云う通り軽い方じゃない。…」(それから)

5. まとめ

形容詞の修飾をうけた名詞述語がつくる、主語との意味関係には、大きくわけて「種類づけ」と「性質・状態づけ」がある。

前者の場合、述語名詞は主語の上位概念となっており、形容詞によって、あるいは形容詞と名詞のそれぞれによって、またあるいは形容詞と述語名詞が一体となって、主語の性質が表される。

後者の場合、述語名詞は主として主語の何らかの側面を表していることが多く、形容詞が述語名詞と一体となることによって、あるいはもっぱら形容詞によって、主語の性質・状態が表される。

どちらの場合も、主語の性質を表す機能が形容詞に傾くと、述語名詞は形式化し、形式名詞が用いられるケースもある。

また、「性質・状態づけ」を表す「形容詞の修飾をうける名詞述語文」の一部は、いわゆる文末名詞文のいくつかのタイプに相当する。形容詞の修飾をうける名詞述語文の有無によって、文末名詞文の種類は二分されるが、それぞれのグループの文末名詞文の構文的・意味的な特徴については今後の課題とする。また、文末名詞文において、述語名詞が動詞句による連体修飾をうける場合と、形容詞による場合とでは、どのような違いがあるのかについても今後考察していかなければならない。

[注]

1) ただし、次のような形容詞が連体修飾句の述語となって名詞を修飾するような場合は除く。

○「幹子は痲性で、料理のときの塩胡椒もきつめなたちである。(思い出ランプ)

また、次のような、アスペクト・モダリティーなどの述語形式になっている場合も除く。

○「あなたも危ないところだったわね、・・・」(バルセロナの休日)

○持ち家を買えず、賃貸で我慢しているわれわれにとっては、この生活環境はうらやましい限り。

(ディズニーランド101の謎)

○薄着になった女の子の姿を見るのは楽しいものだ。(ほくは勉強ができない)

2) 鈴木(1992)、仁田(2010)では「主語」についてそれぞれ次のように記述している。

鈴木(1992)によれば、「主語とは、おおまかにいって、文のあらわす出来事(ひろい意味での)の中心的な実体(特徴のもち主)をあらわす部分で、述語によってその特徴(動作、状態、特性、性質、関係など)がのべられる対象となるものである。」(p.74)

仁田(2010)では、「主語とは事態がそれについて(それをめぐって)語ることになる存在・対象である。これを、主語は、述語の表わす動き・状態・属性を体現し担う主体として、文の表している事態が、それを核として形成される、という事態の中心をなす要素、と説明することもできよう」(p.201)と述べられている。

本稿でも、これらの立場と同様の、「主語」を意味的・統語的に規定する立場をとっている。

3) 主語とは別に、述語で表される性質が誰に該当するのかを「～にとって」「～に」のかたちで示され

ることがある。

○それくらい私にとって、宮沢賢治は怖い人である。(本棚から猫じゃらし)

○みな姉と弟には無関係な人波だった。(おとうと)

○不和な両親を戴いていることは、子供たちにとって随分な負担である。(おとうと)

○えり子さんは、私にとって巨大な存在だった。(満月)

- 4) なお、新屋(1994)はこの分類は名詞述語文だけではなく、形容詞述語文、動詞述語文を含む平叙文一般についてあてはまるものであるとしている。
- 5) 新屋(2014: 109-127)。新屋(1994)の分類は新屋(2014)に再録される際、改訂されているので、ここでは(2014)の分類を用いる。
- 6) 述語名詞が形容詞の修飾をうける文では、後にみるように、述語全体が形容詞的な意味を帯び、何らかの性質や状態が述定されるため、「同定文」の意味を表しにくくなる。「同定文」と判断できる例は少なかった。
- 7) 佐久間(1941)に、物事の性質や状態を述べたり、判断を言い表したりする文を「品定め文」といい、名詞述語あるいは形容詞述語を要求し、ふつう有題文となることが指摘されている。
- 8) 高橋(1984)では名詞述語文の主語と述語の意味関係を、「同一づけ」「種類づけ」「性質づけ」「状態づけ」「動作づけ」に分類している。なお、ここでは「種類づけ」と「性質づけ」を「性格づけ」という上位概念の下位区分としている。
- 9) 高橋(1984: 23-24)。ただし③「別種づけ」は修辭的に異なる②「種づけ」の亜種である。
- 10) 新屋(2009)は、名詞文の類別によって表される性質と、形容詞文で表される性質の表現性のちがいを「発話時の現場的な状況と発話内容との距離から、形容詞文はより直接的・現場密着的、名詞文は、より間接的・概念的であるということができる。」(pp.36-37)と述べている。
- 11) 高橋(1984)にはこのことについて、「述語にわかりきった上位概念をあらわす語をもってきて、その特徴的な内包をえがきだす例が、①のようなものより多い」(p.23)と指摘がある。また、「このことは、その上位概念に含まれないとのべる文において、いっそう強調される。」(p.23)とし、次のような例をあげている。
- おまえは人間ではない。自分のためにいきる人間ではない。(友情)
- 12) 次の文の「～は」が示すものは、述語が表す性質のもち主(=主体)ではなく、述語が表す心的状態がむかう対象を示している。したがって、主語と述語の関係にはないものである。
- 廃墟でパンを嚙るのは妙な気分だった。(パズル)
- だから一旦約束した以上、それを果たさないのは、大変厭な心持です。(こころ)
- 13) 述語名詞が主語の部分や側面である場合(2.2.1と2.2.2)、次のように、「～は～が」の構文や、その名詞を主語として、同じ意味を表す文をつくることができる。
- (75) だけど街で見かける人はみんな黒い髪だわ。(バルセロナの休日)
- 街で見かける人は髪が黒い。／街で見かける人の髪は黒い。
- (76) やっと初めてひとつむいた時、梨はとともいびつな形だった。(夏の庭)

梨は形がいびつだった。／梨の形はいびつだった。

- 14) 新屋 (1989: 2)
- 15) 新屋 (2003: 140)
- 16) 新屋 (1989: 3-5)
- 17) 野田 (2006) では新屋 (1989) および角田 (1996) で扱われている文末名詞をあわせて、分類を試みているが、ここでは新屋 (1989) にあげられた文末名詞に限定し、その分類を紹介する。
- 18) 野田 (2006: 295)
- 19) ただし、新屋 (1989) では述語名詞が主語の部分である場合を文末名詞として扱っていない。

【参考文献】

- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院 (1995年くろしお出版より復刻)
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』159 pp.1-14国語学会 (新屋 (2014) に所収)
- (1994) 「意味構造から見た平叙文分類の試み」『東京外国語大学日本語学科年報』15 pp.1-16
東京外国語大学日本語学科 (新屋 (2014) に所収)
- (2003) 「日本語の述部における名詞の機能」『日本語教育研究論集ジャーナルCAJLE』5 pp.131-147 カナダ日本語教育振興会 (新屋 (2014) に所収)
- (2009) 「形容詞述語と名詞述語—その近くて遠い関係—」『国文学解釈と鑑賞』74-7 pp.30-40
至文堂 (新屋 (2014) に所収)
- (2014) 『ひつじ研究叢書<言語編>第115 巻日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1992) 「主語論をめぐって」『ことばの科学5』pp.73-108むぎ書房
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3-12 pp.18-39 明治書院
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』pp.139-161
ひつじ書房
- 仁田義雄 (2010) 「日本語の主語をめぐって」『日本語文法著作選第4 巻 日本語文法の記述的研究を求めて』pp.191-210 ひつじ書房
- 野田時寛 (2006) 「複文研究メモ (7) —文末名詞をめぐって—」『人文研究紀要』56 pp.275-299 中央大学

【考察対象の用例の出典】

- 湯本夏樹実 (1992) 『夏の庭』新潮文庫/赤川次郎 (1984) 『死体は眠らない』角川文庫/夏目漱石 (1910) 『門』岩波文庫/吉本ばなな (1988) 『うたかた/サンクチュアリ』角川文庫/三浦綾子 (1988) 『小さな郵便車』角川文庫/乃南アサ (1990-1996) 『花盗人』新潮文庫/夏目漱石 (1914) 『ころも』新潮文庫/群ようこ (1994) 『本棚から猫じゃらし』新潮文庫/林望 (1992) 『帰らぬ日遠い昔』講談社文庫/馳星周 (1996) 『不

夜城』角川文庫/さくらももこ (1991) 『モモのかんづめ』集英社/さくらももこ (1995) 『そういうふう
 できている』新潮文庫/群ようこ (1990) 『ホンの本音』角川文庫/宮本輝 (1992) 『彗星物語』文春文庫/
 吉本ばなな (1991) 『キッチン』角川文庫/山田詠美 (1988) 『私は変温動物』新潮文庫/林望 (1991) 『イ
 ギリスは愉快だ』文春文庫/原田宗典 (1991) 『むむむの日々』集英社/安岡章太郎 (1962) 『アメリカ感情
 旅行』岩波新書/夏目漱石 (1909) 『それから』新潮文庫/北杜夫 (1961) 『どくとるマンボウ昆虫記』新潮
 文庫/五木寛之 (1996) 『生きるヒント4』角川文庫/俵万智 (1995) 『三十一文字のパレット』中公文庫/
 向田邦子 (1981) 『あ・うん』文春文庫/T D L 研究会議 (2000) 『ディズニーランド101の謎』新潮文庫/
 柳美里 (1997) 『家族の標本』角川文庫/向田邦子 (1980-81) 『思い出トラップ』新潮文庫/太宰治 (1948)
 『人間失格』新潮文庫/村山由佳 (1996) 『きみのためにできること』集英社文庫/赤川次郎 (1989) 『ふたり』
 新潮文庫/林真理子 (1992) 『バルセロナの休日』角川文庫/中沢けい (1983) 『風のことば海の記憶』中公
 文庫/銀色夏生 (1999) 『散歩とおやつ』角川文庫/山田詠美 (1991-92) 『はくは勉強ができない』新潮文庫
 /太宰治 (1947) 『斜陽』新潮文庫/赤川次郎 (1988) 『天使と悪魔』角川文庫/宮尾登美子 (1989-90) 『松風
 の家』文春文庫/三島由紀夫 (1956) 『金閣寺』新潮文庫/乃南アサ (1998) 『夜離れ』幻冬舎文庫/幸田文
 (1956) 『おとうと』新潮文庫/群ようこ (1991) 『無印失恋物語』角川文庫/宗田理 (1999) 『仮面学園殺人
 事件』角川文庫/吉本ばなな (1988) 『哀しい予感』角川文庫/壺井栄 (1952) 『二十四の瞳』角川文庫/安
 部公房 (1962) 『砂の女』新潮文庫/中場利一 (1994) 『岸和田少年愚連隊』幻冬舎文庫/赤川次郎 (1986)
 『勝手にしゃべる女』新潮文庫/武者小路実篤 (1920) 『友情』新潮文庫/浅田次郎 (1997) 『鉄道員』集英
 社文庫/赤川次郎 (1979) 『三毛猫ホームズの追跡』角川文庫/柳美里 (1997) 『水辺のゆりかご』角川文庫
 /村上春樹 (1996) 『うずまき猫のを見つけかた』新潮文庫/桐島洋子 (1981) 『さようならなんてこわくない』
 角川文庫/銀色夏生 (1991) 『つれづれノート』角川文庫/宮部みゆき (1991) 『返事はいらぬ』新潮文庫
 /井上ひさし (1970) 『ブンとフン』新潮文庫/恩田陸 (2000) 『パズル』祥伝社文庫/乃南アサ (1991) 『ヴェ
 ンサンカンまでに』幻冬舎文庫

(括弧内は作品の刊行年または新聞・雑誌等掲載年である。文庫本刊行あるいは再版にあたって多少の改訂がなされる場合もあるが、この点、本稿の結論に大きく影響をあたえるものではないと考える。なお、本文中の用例の末尾にあげる書名は、紙幅の関係上、一部を省略していることがある。また、煩雑さを避けるため二重括弧を省いて記している。)

(みつのぶ・ひとみ 英語国際学部准教授)